

12. ^{123}I -MIBG SPECT が有用であった転移性褐色細胞腫の1例

土持 進作 谷 淳至 志村 武
中別府良昭 中條 政敬 (鹿児島大・放)
高崎 隆志 吉田 浩巳 (同・一病理)

褐色細胞腫摘出術後の経過観察中に肺転移を認め、 ^{123}I -MIBG SPECT が有用であった1例を報告した。症例は16歳女性。昭和63年に左副腎褐色細胞腫の診断のもと腫瘍摘出術が施行され、以降近医で経過観察されていたが、平成7年8月胸部X線写真およびCTで両側下肺野にそれぞれ1個ずつの小結節影を認めたため、当科受診となった。血中カテコールアミン値の有意な上昇はなかった。 ^{131}I -MIBGシンチグラフィでは明らかな異常集積は認められず、後日施行した ^{123}I -MIBGシンチグラフィのブラー像でも不明瞭であったが、SPECTで腫瘍に一致する異常集積を認め、悪性褐色細胞腫の肺転移と診断可能であった。

13. ^{111}In 標識血小板を用いて下肢静脈血栓と血小板寿命短縮を診断した抗リン脂質抗体症候群の1例

小川 洋二 竹本 吉宏 林 邦昭
(長崎大・放)
木下 博史 (長崎県松浦保健所)

症例は28歳女性、16歳でSLE、25歳で抗リン脂質抗体症候群の診断をうけ、治療が行われていた。血小板数 $62,000/\text{mm}^3$ の時に行われた ^{111}In 標識血小板

による血栓シンチグラムでは、下肢に多発性の集積を認めた。血小板寿命は約3日と短縮していた。下肢静脈造影で深部静脈血栓が認められた。1年後、血小板数 $22\text{万}/\text{mm}^3$ の時に施行された血栓シンチグラムでは下肢の集積像は消失しており、血小板寿命も約8日と正常化していた。抗リン脂質抗体症候群では血栓症、血小板減少が認められる。 ^{111}In 標識血小板を用いると、体内的血栓形成部位の診断と同時に、血小板寿命の測定も可能であり、本疾患の病態把握に有用であった。

14. ^{111}In -DTPA-IgGによる炎症シンチグラフィの有用性の検討

佐々木雅之 一矢 有一 桑原 康雄
吉田 毅 福村 利光 増田 康治
(九州大・放)

新しい炎症シンチグラフィ用薬剤である ^{111}In -DTPA-IgGの有用性を検討した。対象は炎症性腸疾患4例、呼吸器感染症2例、放射線骨壊死に伴う細菌感染症2例、肺癌術後膿瘍1例の合計9例である。検査は ^{111}In -DTPA-IgG 80 MBq 静注後、東芝製GCA 901A/WBにて1日後、2日後にブラー像を撮像した。可能な症例では投与6時間後、3日後にも撮像し、SPECT像も適宜撮像した。副作用は認められなかった。結果は、9例中7例にて病変部に一致した異常集積を認めた。病変の描出は24時間後像が最も明瞭であった。異常を認めなかつた2例のうち、1例は治癒傾向にある肺炎、1例はCRP陰性の潰瘍性大腸炎であった。以上より、 ^{111}In -DTPA-IgGは炎症巣の検出に有用と考えられた。